

砺波市埋蔵文化財調査報告書 第4冊

秋元遺跡発掘調査報告書

—市立東部保育所建設に先立つ緊急発掘調査—

砺波市教育委員会

1990年3月

序

散居村が展開する砺波平野は、たび重なる庄川の洪水によって形成された扇状地ですが、早くより先人が生活した痕跡を、表採された遺物により確認することができます。殊に、微高地と呼ばれる、扇状地を南北に走る帯状の小高い所に、先ず人々が住みついたようです。

今回、市立東部保育所の移築に先立ち、南般若秋元で実施した緊急発掘調査により、平安時代から室町時代にかけての住居址を伴なった遺跡を確認することができました。中筋往来と呼ばれる、古く安定した微高地の一角で発見されたものです。

先人の生活の有り様を知ることは、綿々と統いて現在に至っている私達の生き方の指針となるものです。利便性の追求も必要ですが、我々には先人の残した文化財を後世に伝える使命があります。今後とも、文化財と開発との調整を図ることが、重要課題であります。

小冊子ですが、本書が多くの人々に活用され、地域の歴史と文化の理解の一助になれば幸いです。

終りに、調査に当り、ご援助並びにご協力をいただきました富山大学人文学部考古学教室、及び富山県埋蔵文化財センターの関係各位に感謝の意を表わし、巻頭のことばといたします。

平成2年3月

砺波市教育委員会

教育長 藤田誓寿

例　　言

- 1 本書は富山県砺波市教育委員会が1989年に実施した砺波市秋元所
在の秋元遺跡の発掘調査の成果を報告したものである。
- 2 調査にあたっては、富山県埋蔵文化財センターの協力を得て、後
記の調査団を編成して実施した。
- 3 遺物の復原・実測、図面の整理・製図、写真撮影は田中道子がお
こなった。
- 4 本文は田中道子が執筆した。
- 5 参考文献は本文末にまとめ、通し番号を付した。本文中のルビ數
字は、この参考文献番号である。遺物番号は出土地別に通し番号を
付し、実測図と写真的番号を統一した。
- 6 編集は田中道子がおこなった。
- 7 出土遺物は砺波市郷土資料館で保管している。
- 8 本調査期間中および本書の作成にあたっては、富山県埋蔵文化財
センター、西井龍儀氏、宮田進一氏、安念幹倫氏、森秀典氏、吉岡
康暢氏、小野正敏氏、四柳嘉章氏をはじめとする多く方々から貴重
な御教示を得た。また秋山進午氏、宇野隆夫氏、及び富山大学人文学
部考古学研究室の諸氏に指導・協力を戴いた。記して厚く御礼申
し上げる。

目 次

第1章 調査の概要

1 調査に至る経過	1
2 調査組織と調査の経過	2

第2章 遺跡の立地と歴史的環境

1 遺跡の立地	3
2 周辺の遺跡	3

第3章 発掘調査の成果

1 調査の方法	6
2 層位と遺構	6
3 遺物	7

第4章 考察

1 遺構	14
2 遺物	14

第5章 結語

図版目次

図版 1	調査地域航空写真	3
図版 2	秋元遺跡位置図	3
図版 3	遺跡全景写真	
1	表土発掘後全景	3
2	発掘後全景	3
図版 4	遺構全体図	6
図版 5	層位(1)	
1	調査区南壁の層位 1	6
2	調査区南壁の層位 2	6
図版 6	層位(2)	
1	南壁層位図	6
図版 7	遺構(1)	
1	SB-1 検出	6
2	SB-1 発掘後	6
図版 8	遺構(2)	
1	SK-1 検出	6
2	SK-1 層位	6
図版 9	遺構(3)	
1	SK-1 土師器出土状態	6
2	SK-1 発掘後	6
図版 10	遺構(4)	
1	SK-2 層位	6
2	SK-2 発掘後	6
図版 11	遺構(5)	
1	SK-3 層位	6
2	SK-4 発掘後	6

図版12	遺構(6)	
1	SK-5層位	6
2	SK-6層位	6
図版13	遺構(7)	
1	SK-7層位	6
2	SK-8層位	6
図版14	遺構(8)	
1	SD-1層位(1)	6
2	SD-1層位(2)	6
図版15	遺構実測図(1)	6
図版16	遺構実測図(2)	6
図版17	遺物実測図(1)	7~9
図版18	遺物実測図(2)	7
図版19	遺構出土遺物写真(1)	7・8
図版20	包含層出土遺物写真(2)	8・9
図版21	試掘調査出土遺物写真(3)	9

挿図目次

第1図	調査区の地形	1
第2図	秋元遺跡と周辺の遺跡	4

表目次

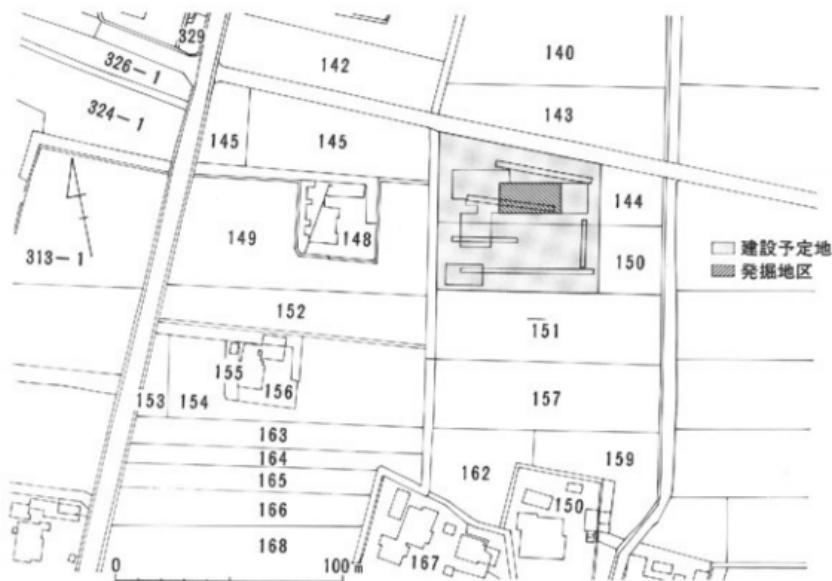
第1表	周辺の遺跡	5
第2表	遺物観察表	10

第1章 調査の概要

1 調査に至る経過（第1図）

秋元遺跡は砺波市秋元における砺波市立東部保育所建設予定地に所在する遺跡である。本調査に先立って1989年7月24日に遺跡の範囲と遺存状況を確認するための試掘調査をおこなった。その結果、須恵器、土師器、珠洲、越中瀬戸など古代・中世・近世の遺物約20点と、柱穴、竪穴、溝など14個所あまりの遺構が発見された。

発見された遺構については、園舎の建設予定地区について発掘調査をおこない、他の地区は敷地造成による盛り土をおこなうため、遺構が工事による削平等を受けないことから現状のまま保存することとなった。



第1図 調査区の地形

2 調査組織と調査の経過

秋元遺跡の発掘調査は下記の調査団を編成して実施した。1989年8月14日には、調査団打ち合わせ会を開催し、調査の方法、発掘の手順等について検討を加えた。8月18日から9月2日にかけて発掘調査をおこなった。

調査日誌抄

8月14日	調査団打ち合わせ会	8月25日	遺構の検出
8月18日	耕土剥ぎ	8月26日	遺構発掘開始
8月19日	耕土剥ぎ, 発掘区の杭打ち ベルトコンベアの設置	8月28日	遺構層位写真撮影
8月21日	発掘調査開始	8月29日	遺構層位図作成
8月22日	遺構の広がりを確認するため 発掘区東側を約6m拡張	8月30日	遺構発掘終了
8月23日	包含層発掘終了	8月31日	遺構発掘後写真撮影
8月24日	遺構面検出	9月 1日	発掘後全景写真撮影
		9月 2日	遺構実測終了

発掘調査の組織および参加者・協力者

調査主体者 研波市教育委員会

調査員 田中道子(富山大学大学院人文科学研究科1年)

調査補助員 小田木治太郎(富山大学大学院人文科学研究科2年), 長谷川健一,
亀井聰, 笹川修一(以上富山大学人文学部考古学研究室学生)

事務局 研波市社会教育課

なお調査期間を通じて、地権者である高畠吉弘氏をはじめ地元の方々から暖かい御助力を賜った。この場を借りて厚く御礼申し上げる。

第2章 遺跡の立地と歴史的環境

1 秋元遺跡の立地（図版1・2）

砺波市は富山県西部に位置し、面積は96.33m²を占める。市の東は婦中町・小杉町、北は高岡市・福岡町、西は小矢部市、南は庄川町・福野町に接し、市の東端を庄川が北流する。地勢は南東部が丘陵性山地であり、東部が庄川右岸の河岸段丘、庄川以西は庄川・小矢部川の形成した複合扇状地である。

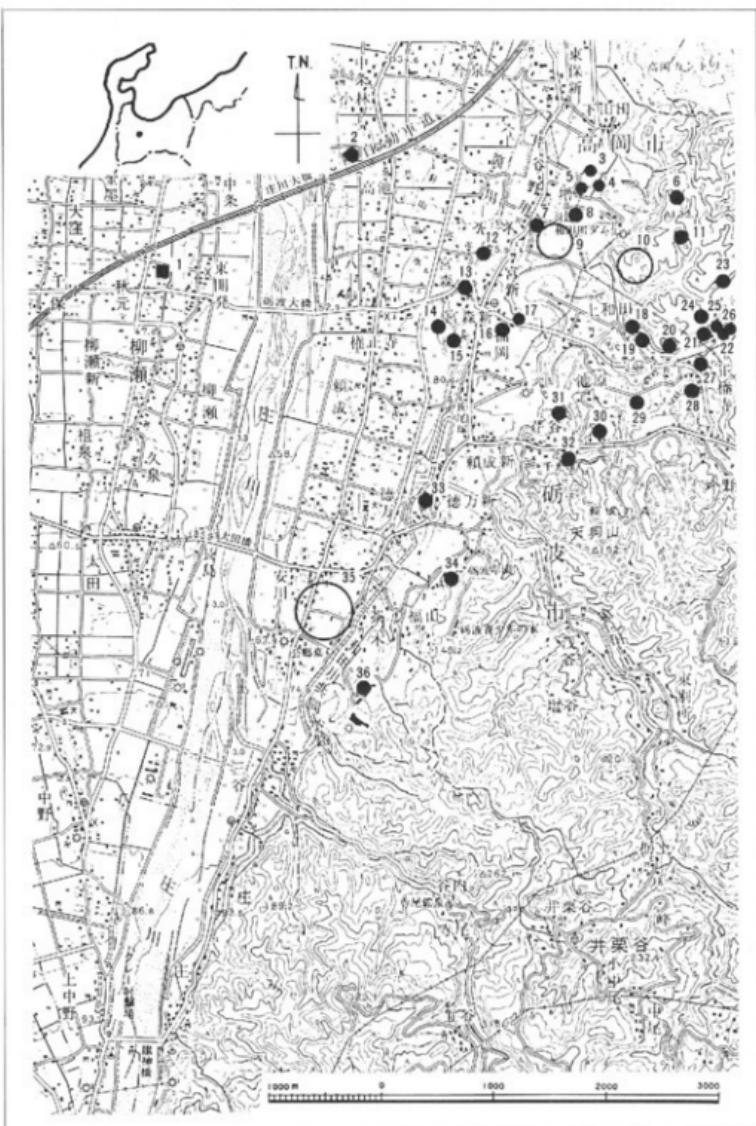
当遺跡は庄川左岸の、庄川と旧庄川の流路である千保川間の扇状地微高地に位置し、標高約45mを測る。この微高地は庄川の水害を直接受けない安定した土地であるとともに、太田・久泉・柳瀬・秋元・西部金屋と続く中筋往来の道筋にある。中筋往来とは庄川左岸の、高岡から大清水を経て、秋元・柳瀬・太田、さらに井波に至る道の俗称である。なおこの微高地は中世には徳大寺家の莊園である般若野莊の莊域にあたる。^{文献3}

2 周辺の遺跡（第2図、第1表）

砺波市では從来、庄川右岸の河岸段丘においていくつかの遺跡が知られている。

庄川右岸の河岸段丘は芹谷野段丘と呼ばれ、標高約80mを測る庄川の隆起扇状地である。この段丘の東側には和田川の河岸段丘があり、その川の背後には小高い山が連なる。この芹谷野段丘と和田川の河岸段丘上には、旧石器時代から中・近世まで数多くの遺跡が点在しており、とくに前期から晩期に至る縄文時代と古代・中世の遺跡が集中している。その内容も集落遺跡の他に須恵器窯址・製鉄址・城館址を含んでいる。しかし弥生時代から古墳時代にかけての遺跡は全く知られていない。²¹

これに対して庄川左岸の扇状地を中心とする地域は從来、遺跡の様相がほとんど判っていなかった。当地域は現在散居村が展開し、中世莊園の存在も知られていることから、その開発過程を明らかにすることには重要な意義があろう。この意味で、秋元遺跡の調査が実施されたことには少なからぬ意味がある。



第2図 秋元遭路と周辺の道路(1/50,000)

第1表 周辺の遺跡

番号	遺跡名	所在地	時代	文献
1	秋元遺跡	砺波市秋元	平安・近世	
2	高池遺跡	砺波市東保	中世	17
3	高沢島Ⅰ遺跡	砺波市増山	旧石器 繩文前期	15, 18, 24
4	高沢島Ⅱ遺跡	砺波市増山	繩文中期 奈良・平安	15, 18, 24
5	高沢島Ⅲ遺跡	砺波市増山	奈良・平安	15, 18, 24
6	増山龜山遺跡	砺波市増山字高津保里	中世	15, 18, 25, 30
7	増山窯跡	砺波市増山字妙覚寺坂	奈良・平安	1, 12, 15, 18, 19, 22, 30
8	増山窯跡No2	砺波市増山	奈良・平安	1, 12, 15, 18
9	増山遺跡	砺波市増山	繩文中・後期 奈良 中・近世	15, 18, 24
10	増山城跡	砺波市増山字城山	中世	15, 18, 22, 24, 25
11	七ツ尾遺跡	砺波市増山	中世	15
12	宮新窯跡	砺波市宮新	奈良	1, 12, 18, 30
13	宮森新北島Ⅰ遺跡	砺波市宮森新字北島	繩文前一晚期 奈良・近世	18, 22, 24
14	宮森新大谷島遺跡	砺波市宮森新字大谷	繩文中一晚期 奈良・平安	22, 24, 30
15	敷照寺遺跡	砺波市宮森新字西島	繩文中期 平安	18, 19, 22, 24, 30
16	宮森新天池遺跡	砺波市宮森新字天池	繩文中期	22, 30
17	上和田遺跡	砺波市上和田字平等	繩文中・晚期	15, 18, 24, 30
18	团子地窯跡	砺波市増山	平安	1, 12, 15, 19
19	増山製鉄窯跡	砺波市増山	奈良・平安	15
20	増山製鉄遺跡	砺波市増山	奈良・平安	15
21	増山製鉄遺跡	砺波市増山	奈良・平安	15
22	増山製鉄遺跡	砺波市増山	奈良・平安	15
23	増山笹山窯跡	砺波市増山字笹山	平安	1, 12
24	正権寺遺跡	砺波市正権寺	繩文	15, 30
25	小丸山遺跡	砺波市正権寺	旧石器?	15
26	小丸山窯跡	砺波市正権寺	平安	1, 12, 15
27	前山遺跡	砺波市正権寺	平安	15
28	般若遺跡	砺波市正権寺	繩文中期	15, 30
29	丸山古墳	砺波市池ノ原字陳山		15, 19, 30
30	池原遺跡	砺波市池ノ原	旧石器 繩文中期	15, 30
31	芹谷北総念寺遺跡	砺波市芹谷	繩文中期	18, 22, 24
32	芹谷遺跡	砺波市芹谷	旧石器 繩文前・中期 奈良・平安	15, 30
33	二合遺跡	砺波市三合		30
34	福山文跡	砺波市徳方字赤坂	奈良・平安	1, 12, 16, 19, 20, 30
35	安川遺跡	砺波市安川	奈良・平安	16
36	安川城跡	砺波市安川字父食	中世	30

第3章 発掘調査の成果

1 調査の方法

調査発掘区の地形に沿って一辺2m方眼を設定して実施した。各方眼は、その北東隅番号によって標記し、包含層出土遺物はこの地区ごとに取り上げた。水準は道路工事に伴つて設置された基準点を使い、平面図は縮尺10分の1で割付実測した。

2 層位と遺構(図版5~16)

調査区の層位は調査区の南壁で観察したもので、第1層耕土、第2層黒色土、第3層暗褐色土、第4層黄褐色粘質土、第5層暗茶褐色土、第6層黒灰色、第7層黄褐色砂質土、第8層疊混黄褐色土地山となっている。

遺物の包含層は第2層黒色土であり、第4・5・6層は耕土と黒色土の間にありほとんど遺物を含まない耕土に似た層であり、第7・8層は地山である。

調査区は地山に起伏があり、遺構が集中している調査区東半は地表面が比較的低く、遺物を包含する黒色土が厚く堆積する。また調査区の南壁層位図にはあらわれないが、地山上面に黄褐色砂質土が堆積するのも調査区東半であり、庄川の支流の流路であったと考えられる。

また調査区西半では黒色土の堆積が非常に薄く、とくに北西地区では昭和43年度の基盤整備の際に攪乱を受けたと考えられ、礫が集中して投げ込まれたような状態である。

検出した遺構は掘立柱建物1、溝2、土壙8、ピット57、風倒木痕4である。

掘立柱建物は調査区東北で検出したものであり、調査区外に延びている可能性が高く、南北東西は2間×3間以上あると推定する。柱間の規格性はあまりない。建物の主軸は東に23.8°振れている。

SD-1は調査区の中央で検出したもので、南北9.5m、幅0.4m、深さ8cmを測り、南端は東に屈曲する。北端は攪乱のため検出できなかったが、おそらくさらに調査区外に延びていたと考える。主軸は北から東へ14°振れている。

SD-2は調査区の東端で検出したもので、南北3.8m、幅0.5m、深さ6cmを測る。

SK-1の平面形はほぼ円形で、径2.3m、深さ60cmを測り、すり鉢状を呈する。比較的出土遺物が多い。層位は黒色土・暗褐色土に分層できるが、遺物はすべて黒色土から出土

している。黒色土には人頭大から径10cm前後の川原石を含むが、暗褐色土は石をほとんど含まない。

SK-2の平面形はほぼ円形で、径1m、深さ70cmを測る。穴をほぼ垂直に掘り下げているが、当地は地下水位が低いことから井戸の可能性は低い。

SK-3の平面形は東西に長い長方形で、長辺1.5m、短辺1.2m、深さ10cmを測る。

SK-4の平面形は楕円形を呈し、長径1.5m、短径0.7m、深さ17.5cmを測る。南側にピットと切りあっており、ピットは径0.5m、深さ58cmを測る柱穴であると考える。

SK-5の平面形は楕円形を呈し、長径1.3m、短径0.9m、深さ11cmを測り、北側には柱穴と考えられる径0.7m、深さ58cmのピットを含む。また東側には径0.6m、深さ30cmのピットがつく。

SK-6の平面形は東西に長い長方形を呈し、長辺1.3m、短辺0.9m、深さ30cmを測る。

SK-7は南側の調査区外に延びているため、その形は明らかでないが、平面形は南北に長い長方形を呈すると考える。短辺1m、深さ13cmを測る。

SK-8は調査区西半から更に南側の調査区外に延びており、その平面形は明らかではないが、おそらく円形もしくは楕円形を呈すると考える。確認できる長径2.5m、深さ50cmを測る。

SP-39の平面形は東西に長い長方形の西側にピットがついた形を呈する。長辺2.4m、短辺1.4m、深さ14cm、ピットの径0.9m、深さ27cmを測る。出土遺物はわずかである。

SP-42は風倒木痕4にかんだもので、径0.6m、深さ33cmを測る。1点のみではあるが白磁が出土している。

3 出 土 遺 物（図版17~21・第2表）

本遺跡の出土遺物は、中国陶磁・白磁・青磁・瀬戸・越中瀬戸・瓦器・珠洲・土師器・鉄釘・鉄鎌か鉄包丁・球状土製品・植物の根・炭であり、総量339破片・口縁部6.5個体分である。遺構出土遺物は134破片・3.8個体分、包含層出土遺物は147破片・1.9個体分である。また試掘調査では須恵器・土師器・珠洲・越中瀬戸・鉄鎌が出土しており、58破片・0.7個体分である。遺物が比較的集中して出土したのはSK-1のみで、ほとんどは散在している。

以下では各遺物について記述するが、法量・胎土・色調などの詳細な点については第2表遺物観察表を参照していただきたい。

SK-1出土遺物(図版17・1~6, 図版19・1~6)

1は土師器の皿。底部回転糸切りの、器壁の非常に薄いきれいなつくりである。器形の特徴は、直線的にのびた体部が口縁部ちかくで稜をもって上方に折れ曲がる点である。口縁部には煤が付着している。

2は土師器の皿。底部は回転糸切りであるが、1とは異なり、器壁の厚いものである。

3は土師器の皿。底部は回転糸切り後削り調整をおこなう。煤は付着しておらず、底部中央に焼成前穿孔がある。

4は瀬戸の壺。褐釉がかかった四耳壺写しのものである。

5は珠洲の甕。体部の破片である。

6は球状土製品。

その他の造構出土遺物(図版17・7~16, 図版19・7~16)

7・11は土師器の皿。底部は回転糸切りである。

9・10は土師器の皿。底部は回転撫で調整である。

8は白磁の多角碗。胎土が悪く、被熱している。高台は割り高台で、底部外面は削っている。

12~14は珠洲の甕。口縁部破片と体部破片である。

15は珠洲の壺。底部は回転糸切りである。

16は瓦器の火鉢。口縁部近くに2条の凸帯を巡らし、その間に筆描文様を施している。

包含層出土遺物(図版17・17~42, 図版20・17~42)

17は白磁の碗。8とは異なり丸い体部をもつものである。胎土が悪く被熱している。高台は割り高台で、底部外面は削っている。

18は越中瀬戸の鉄釉壺口縁部。

19は越中瀬戸の碗である。高台が断面三角形にちかくなる。内面には乳白色の釉がかかる。

20は伊万里染付の碗。口縁端部に茶色、屈曲部内外面に灰色の彩色がある。

21は京焼系の黄釉碗。

22は中国陶磁の壺。外面に褐釉がかかり、肩部に耳がつく。耳は中國陶磁特有の断面円形でアーチ状を呈するものと考える。

23~33は土師器の皿。24~26・29・31~33は底部回転糸切りであり、27・28・30は底部不定方向撫で調整である。回転糸切りのものは直線的な体部が底部ちかくで屈曲する。不定方向撫で調整のものは、丸みをもった底部が、体部下部で段をもつ。

34～39は珠洲の甕。39は口径が78cmの大甕である。

40～42は鉄製品。40・41は釘。断面ほぼ正方形である。42は鎌あるいは包丁。断面三角形である。

試掘調査出土品・その他表採遺物（図版18・1～14、図版21・1～14）

1は土師器の皿。底部は範切り後回転撫で調整。

2～4・6は越中瀬戸の椀。2は大型の椀で、高台は断面四角形でしっかりしている。3は壺の底部。底部は回転糸切り。4・6は椀。高台は断面三角形。

5は青磁の壺。頸部の破片である。

7・8は珠洲の甕。体部の破片である。

9は瓦器の火舍。外面に雷文と菊花のスタンプ文を施す。

10は珠洲のすり鉢。内面には卸目がなく、外面と口縁部内面にカキメを施す。

11・12は須恵器の甕。11は内面細同心円文。12は外面格子叩き。

13は須恵器の壺。口縁部破片である。

14は須恵器の鍋。内外面にカキメ調整。

15は鉄鎧。

16は珠洲の壺。地元の元井氏が調査区付近の田から表採し、寄贈されたもの。

表 2 第 1 遺物銀察表

第2表のつづき

国版番号	出力位置	種類	動力	器	機	口径	燃素高電位有無	調	量	胎	土	整成	色	調	備考
国版17-19	X12Y18	油中機戸	油			11.6	0.8	内外面：回転槽で 内外面：回転槽で	砂粒を含む	良好	黄光色	乳白色の輪	内面：乳白色の輪	外打	
国版17-20	X1Y12- X1Y14	伊万里系糞斗	油					内外面：回転槽で	砂粒	良好	灰光色	外面：灰光色	内面：灰光色	内面：灰光色	内面：灰光色
国版17-21	X2Y22	油砲系	油					内外面：回転槽で	砂粒	良好	灰光色	外面：灰光色・輪の 輪	内面：灰光色	外打	
国版17-22	X2Y14- X1Y14	中國陶磁	瓷			8.0	3.2	内外面：回転槽で 内外面：回転槽で	砂粒	良好	墨褐色	墨褐色	内面：墨褐色	内面：墨褐色	内面：墨褐色
国版17-23	X2Y22	土油器	油					外面：回転槽で、底部回転孔有り	砂粒	酸化軟質	灰褐色	内面：黑色	内面：墨褐色	内面：墨褐色	内面：墨褐色
国版17-24	X2Y28	土油器	油					内面：回転槽で	砂粒	酸化軟質	灰褐色	内面：黑色	内面：墨褐色	内面：墨褐色	内面：墨褐色
国版17-25	X2Y26	土油器	油					外面：底面回転孔有り	砂粒	酸化軟質	灰褐色	内面：黑色	内面：墨褐色	内面：墨褐色	内面：墨褐色
国版17-26	X4Y12	土油器	油					内面：回転槽で	砂粒	酸化軟質	灰褐色	内面：黑色	内面：墨褐色	内面：墨褐色	内面：墨褐色
国版17-27	X2Y24	土油器	油			8.4	1.9	3.3	外面：回転槽で、底部回転孔有り	砂粒	酸化軟質	灰褐色	内面：墨褐色	内面：墨褐色	内面：墨褐色
国版17-28	X4Y12	土油器	油			8.0	2.0	1.1	外面：回転槽で、底部回転孔有り	砂粒を含む	酸化軟質	灰光色	内面：墨褐色	内面：墨褐色	内面：墨褐色
国版17-29	X2Y12	土油器	油					内外面：回転槽で、底部回転孔有り	砂粒	酸化軟質	灰褐色	内面：墨褐色	内面：墨褐色	内面：墨褐色	内面：墨褐色
国版17-30	X4Y20	土油器	油			8	1.2	1	内外面：回転槽で、底部回転孔有り	砂粒を含む	酸化軟質	内面：青系褐色	内面：青系褐色	内面：青系褐色	内面：青系褐色
国版17-31	X4Y14	十油器	油					内外面：回転槽で、底部回転孔有り	砂粒を含む	酸化軟質	灰褐色	内面：青系褐色	内面：青系褐色	内面：青系褐色	内面：青系褐色
国版17-32	X2Y12	土油器	油					内外面：回転槽で、底部回転孔有り	砂粒	酸化軟質	灰褐色	内面：青系褐色	内面：青系褐色	内面：青系褐色	内面：青系褐色
国版17-33	X2Y12- X2Y14	土油器	油					内外面：回転槽で、底部回転孔有り	砂粒	酸化軟質	灰褐色	内面：青系褐色	内面：青系褐色	内面：青系褐色	内面：青系褐色
国版17-34	X4Y12	球	油	柔				内外面：回転槽で	砂粒	良好	灰褐色	内面：灰褐色	内面：灰褐色	内面：灰褐色	内面：灰褐色

第2表のつづき 図版番号	出土位置	種類	器	形	口径	蓋高	底	調	縫	鉗	土	鉢成色	調	縫	器名
國版17-35 X4Y14	珠形	甕	甕	外曲：平行9条 内面：凹輪槽						鉗針を含む 鉢面		奥灰			
國版17-36 X6Y20・ X12Y26	珠形	甕	甕	外曲：平行7条 内面：凹輪槽						鉗針を含む 鉢面		奥灰			
國版17-37 X2Y6	珠形	甕	甕	外曲：平行7条 内面：凹輪槽						鉗針を含む 鉢面		奥灰			
國版17-38 X4Y16	珠形	甕	甕	外曲：平行8条 内面：平行7条	40	0.3				鉗針を含む 鉢面		良好			
國版17-39 X2Y20	珠形	甕	甕	外曲：平行6条 内面：平行6条	78	0.5				鉗針を含む 鉢面		良好			
國版17-40 X3Y20	瓶	鉢	鉢												
國版17-41 X4Y10	瓶	鉢	鉢												
國版17-42 X4Y14	1レバツチ底盤	鉢	鉢												
國版18- 1 1レバツチ底盤	上部器	鉢	鉢												
國版18- 2 2レバツチ底盤	越中繩口	鉢	鉢												
國版18- 3 5レバツチ十、 越中繩口	三	鉢	鉢												
國版18- 4 4レバツチ底盤	越中繩口	鉢	鉢												
國版18- 5 4レバツチ十、 背縫	三	鉢	鉢												
國版18- 6 4レバツチ十、 越中繩口	三	鉢	鉢												
國版18- 7 2レバツチ底盤	珠形	甕	甕												
國版18- 8 2レバツチ底盤	上部器	甕	甕												
國版18- 9 4レバツチ土	丸器	甕	甕												
國版18-10 4レバツチ土	珠形	甕	甕												
國版18-11 4レバツチ土	須留器	須留器	須留器												

第2表のつづき

器物番号	出土位置	種類	器種	高さ	幅	調査	土	焼成度	色	調査備考
円版18-12	4ひづれ土	祭祀器	壺	11.1	11.1	外面：格子6条×7条 内面：同心円	骨針を含む 骨粉多含む	良好	灰青色	
円版18-13	4ひづれ土上	祭祀器	壺	13	0.2	内面：同心円	骨針を含む	良好	灰青色	
円版18-14	不規	祭祀器	壺	28.4	-	内外面：同前 内面：カキノ	骨針を含む	良好	灰青色	
円版18-15	4ひづれ法被	具	壺	-	-	-	骨密	良好	灰青色	
円版18-16	桃井氏古墳	耳糸	壺	-	-	外面：平行9条	骨針を含む Sennari窯の影響を含む	良好	灰青色	

第4章 考察

1 遺構

当遺跡で検出した遺構は前述したようにその主なものは掘立柱建物・溝・土壌である。建物SB-1の柱穴は柱間に規格性がなく、中世の建物に特徴的な複雑な間取りであったことを推測できる。

SD-1は浅いものであるが、主軸が14° 東に振れている、南端が東に屈曲していることと、さらに北に延びると考えられることから、おそらくこの建物の敷地を区画する溝であったのではないかと考える。

SK-1は瀬戸の壺・土師器の皿・球状土製品が出土している遺構である。完形の土師器の皿が据えたように上向きで出土していることや、底部中央に焼成前穿孔する皿があること、さらに石が群をなしていることから祭祀に関係した宗教的色彩の強い遺構であると考える。

上述の遺構は15世紀に比定でき、その他の遺構もほとんどが同時期に属する可能性が高い。おそらく建物・溝・土壌・風倒木が一つのまとまりをもって中世後期の屋敷を構成していたのであろう。

2 遺物

当遺跡出土の遺物は試掘調査出土品を含め総計339破片・口縁部6.5個体分である。そのうち年代を判定できるものは古代8破片・0.2個体分、中世318破片・6.2個体分、近世14破片・0.1個体分であり、当地の扇状地の開発過程の一端を示している。

古代は須恵器8破片・0.2個体分で構成される。試掘の際出土した須恵器の甕は外面部に格子状叩き、内面に細同心円文があることから8世紀後半期のものであると考えられ、他の須恵器もおそらく同時期として捉えることができると思われる。

中世は土師器234破片・5.8個体分・珠洲46破片・0.2個体分・瀬戸2破片・0.3個体分・白磁6破片・1.0個体分・青磁1破片・中国陶磁3破片・瓦器2破片・鉄製品15破片・球状土製品9破片で構成される。

また遺物が集中して出土したSK-1においては総計91破片・2.9個体分であり、土師器78破片・2.7個体分・珠洲1破片・瀬戸2破片・0.3個体分・球状土製品1点で構成される。

土師器の皿は底部回転糸切りで、器壁の薄い丁寧なつくりのものと、底部が丸みをもち不定方向撫で調整で、器壁の厚い雑なつくりのものに大別できる。底部回転糸切りのものは体部下部が屈曲し、体部は直線的にのびるものが一般的である。

一方底部撫で調整で雑なつくりのものは在地のものと考えられ、底部が丸みをもち体部の立ち上がりが短いという特徴をもつ。これは小矢部市日の宮遺跡・同桜町遺跡・人善町じょうべのま遺跡・魚津市弓庄遺跡等出土のものに類似しており、当期の一般的なものであるといえよう。
文庫4-6-7-8-9-10-11-21-22-28

SK-1出土のものは器壁の薄い丁寧なつくりであり、体部が稜をもって立ち上がる特殊な形態である。在地の土師器の皿にはみられないものである。またSK-1出土の皿には底部中央に焼成前に穿孔したものであり、底部外側は回転糸切り後削り調整を行っている。内外面ともに煤が付着しておらず、灯明皿に使用したものではないと考えられることから、なんらかの祭祀に関係するものではないかと思われる。

珠洲焼は甕が中心ではほとんどが破片である。口縁形態から甕は吉岡編年V期のものと考える。
文庫2-13-32-33-34

施釉陶磁器についてみると、白磁の多角碗に加え、瀬戸の壺・中国製の褐釉壺という、比較的高級なものを使用していたと考えられる。

瓦器は火鉢のみであるが、外面に雷文と菊花のスタンプ文を施すものと、凸帯と箇描文を施すものの2種がある。前者は大和産、後者は在地産の可能性が高い。

各器種の基本的組成は椀が白磁、皿が土師器、壺が中国陶磁・瀬戸、甕・すり鉢が珠洲、食器ではないが火鉢は瓦器である。在地産に加え高級品や遠隔地からの流通品により構成され、器種分担する様相がみられる。これらのはほとんどは15世紀に比定できるものである。

近世は越中瀬戸10破片・京焼系1破片・伊万里系3破片・0.1個体分・鉄製品で構成される。その組成は越中瀬戸の椀・壺、京焼系の壺、伊万里系の椀である。鉄製品は釘・鎌・鍔といった生活必需品ばかりである。

第5章 結語

本調査で検出・出土した遺構・遺物より、遺跡の年代は古代から近世にいたることが判明した。年代の中心は古代は8世紀、中世は15世紀にあり、とくに中世の遺構・遺物が主体をなしている。

中世の屋敷と考える遺構群は掘立柱建物の柱間が複雑に区切られることや、溝によって敷地を区画していることなどを確認でき、さらには祭祀に関する遺物が出土する遺構が検出されたことから当遺跡が一定程度以上の格式をもつものであることを推し測ることができる。出土遺物においても中国製の白磁多角碗や褐釉壺などが存在することもこれを裏付ける。今後集落全体の様相が判明してくれば、その位置づけも可能となろう。

当地は中世の徳大寺家の荘園である般若野荘の荘域であり、今後さらに周辺に当期の遺跡が発見される可能性が高い。

本調査では調査面積が狭かったこともあり、遺跡の全容を明らかにするには至っていない。しかしこれまで遺跡がほとんど確認されていなかった庄川左岸扇状地で遺跡が発掘されたことは、当地の歴史を知るうえで重要な資料を提供することになり、また今後の当地域の研究についての課題を提示したという点では大きな意義をもつものと考える。

註

- 1 増山城の通称「二ノ丸」に近い「又兵衛清水」脇から発見された一片の土師器は、古式土師器の可能性があり、発見位置やその年代から空白期の手がかりとなる大きな意味をもつと考えられる。^{文書15}
- 2 今回の発掘調査期間中に調査地区の北隣の田から昭和43年の道路工事時に珠洲焼が多量に出土し、地元の方がその遺物を保管している。また調査区の西側を北流する堂川では昭和35年の用水工事時に珠洲焼が多量に出土したが、用水の底に埋め戻されたという話を地元の方々からうかがった。

参考文献

- 1 安念幹倫「栴檀野窯跡群の概要」『シンポジュウム北陸の古代土器研究の現状と課題』資料編 1988年。
- 2 石川県教育委員会・珠洲古窯跡発掘調査委員会『珠洲法住寺第3号窯石川県古窯跡第2年次調査報告』1977年。
- 3 魚津市教育委員会『富山県魚津市本江地内埋蔵文化財発掘調査報告書』1986年。
- 4 宇野隆夫「越中弓庄城跡の土師器」『大境』第10号 富山考古学会 1986年。
- 5 尾田武雄『砺波の石仏』1989年。
- 6 小矢部市教育委員会『富山県小矢部市桜町遺跡—城山都市下水路新設工事に伴う産田地区の調査—』小矢部市埋蔵文化財調査報告書第15冊 1984年。
- 7 小矢部市教育委員会『富山県小矢部市桜町遺跡—県道改良工事に伴う深沢地区的調査—』小矢部市埋蔵文化財調査報告書第26冊 1989年。
- 8 上市町教育委員会『富山県上市町弓庄遺跡第2次緊急発掘調査概要』1982年。
- 9 上市町教育委員会『富山県上市町弓庄遺跡第3次緊急発掘調査概要』1983年。
- 10 上市町教育委員会『富山県上市町弓庄遺跡第4次緊急発掘調査概要』1984年。
- 11 上市町教育委員会『富山県上市町弓庄遺跡第5次緊急発掘調査概要』1985年。
- 12 北野博司・池野正男「北陸における須恵器生産」『北陸の古代手工業生産』北陸古代手工業生産史研究会 1989年。
- 13 珠洲市史編纂専門委員会『珠洲市史』第一巻=資料編自然・考古・古代 1976年。
- 14 砺波郷土資料館『砺波の石仏Ⅲ般若野荘と石造物展』1988年。

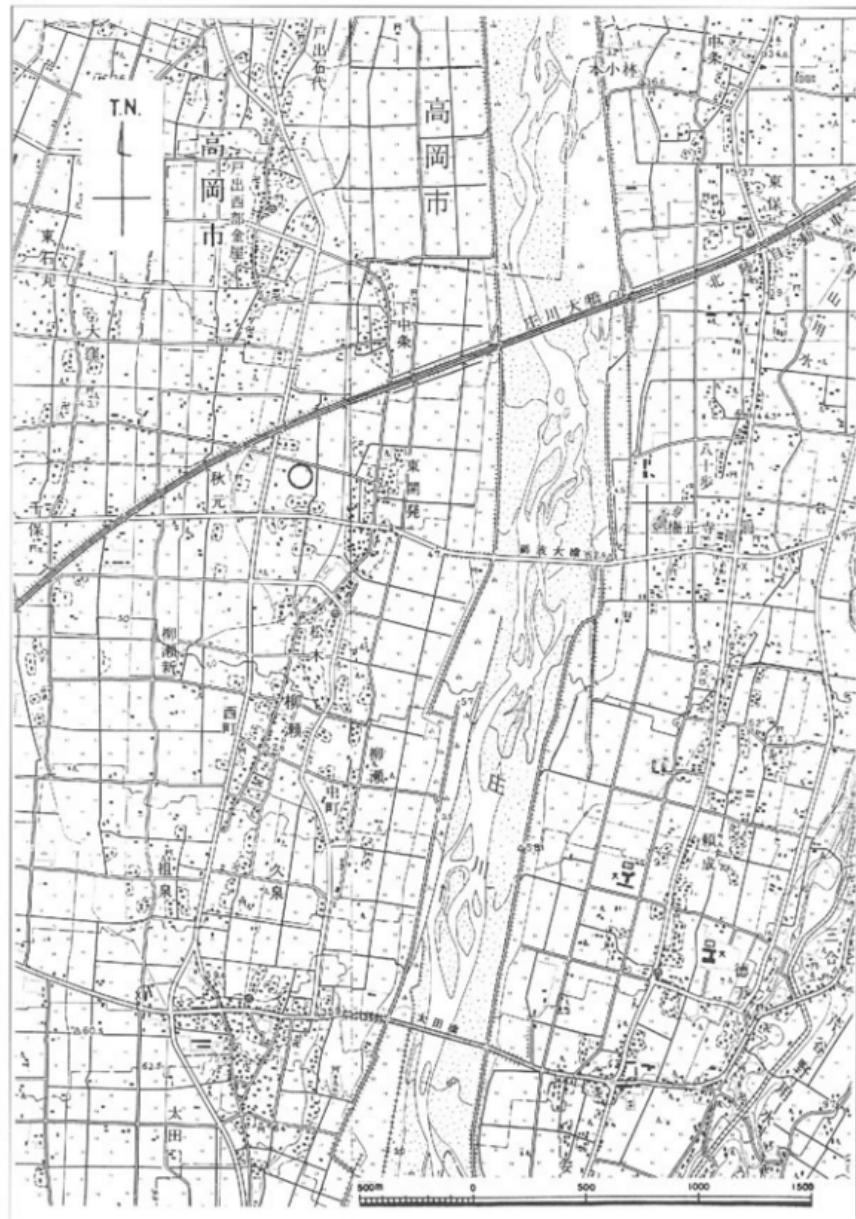
- 15 砺波郷土資料館・砺波市立砺波散村地域研究所・増山城調査グループ『富山県指定史跡増山城跡調査中間報告書』1987年。
- 16 砺波郷土資料館上藏友の会『十歳』創刊号 1988年。
- 17 砺波市教育委員会『砺波市東保高池遺跡発掘調査概報』1973年。
- 18 砺波市教育委員会『富山県砺波市柏原野遺跡群子備調査概要』1978年。
- 19 砺波市史編纂委員会『砺波市史』1965年。
- 20 砺波市史編纂委員会・砺波市文化財審議委員会『砺波市福山<慈力赤坂>須恵器窯発掘報告』1962年。
- 21 富山県教育委員会『富山県埋蔵文化財調査報告書Ⅲ 井波町高瀬遺跡・入善町じょうべのま遺跡発掘調査報告書』1974年。
- 22 富山県教育委員会『富山県砺波市嚴照寺遺跡緊急発掘調査概要』1977年。
- 23 富山県教育委員会『富山県小矢部市日の宮遺跡発掘調査報告書』1978年。
- 24 富山県教育委員会『富山県砺波市宮森新北島I遺跡緊急発掘調査概要』1978年。
- 25 とやま歴史的環境づくり研究会『増山城歴史公園構想—水と緑と歴史の公園—』1989年。
- 26 西井龍儀「砺波平野進出の足跡—周辺地域の考古資料—」『砺波散村地域研究所研究紀要』第2号 砺波散村地域研究所 1985年。
- 27 西井龍儀「小矢部川左岸における須恵器生産開始期の検討—安堵口ノ部地内の窯跡から—」『両越地域史研究』創刊号 1988年。
- 28 入善町教育委員会『じょうべのま遺跡—C・K地区の調査—』1985年。
- 29 舟崎久雄「上器の編年」『富山県埋蔵文化財調査報告書Ⅲ』富山県教育委員会 1974年。
- 30 文化庁文化財保護部『全国遺跡地図 富山県』1974年。
- 31 北陸中世土器研究会『第2回北陸中世土器研究会資料北陸における越前陶の諸問題』1989年。
- 32 宮田進一・宇野隆大・酒井重洋「越中における中世土器の様相」『第1回北陸中世土器研究会資料北陸の中世土器・陶磁器・漆器』北陸中世土器研究会 1988年。
- 33 吉岡康暢「中世陶器の生産と流通」『考古学研究』第27巻第4号 考古学研究会 1981年。
- 34 吉岡康暢「珠洲系陶器の歴年代基準資料」『北陸の考古学』石川考古学研究会会誌第26号 石川考古学研究会 1983年。

図 版



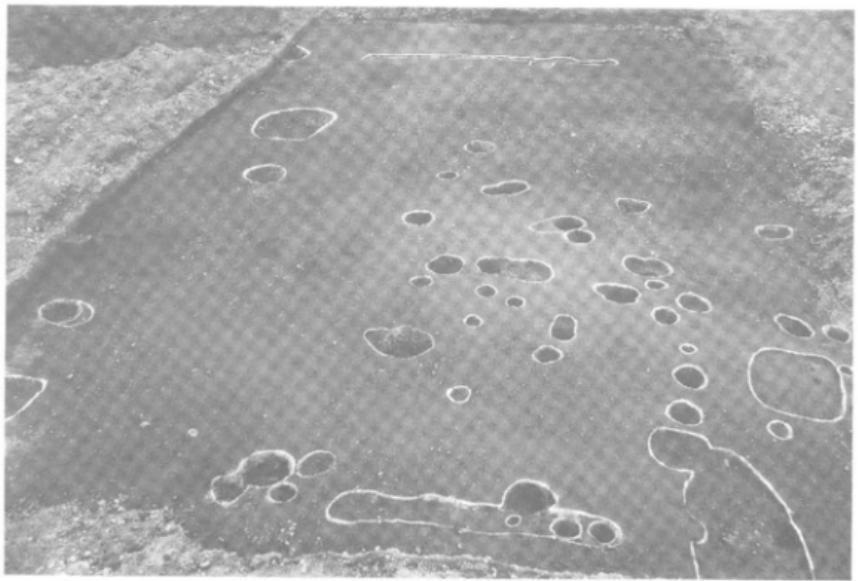
(昭和50年撮影 縮尺10,000分の1)

図版二 秋元遺跡位置図





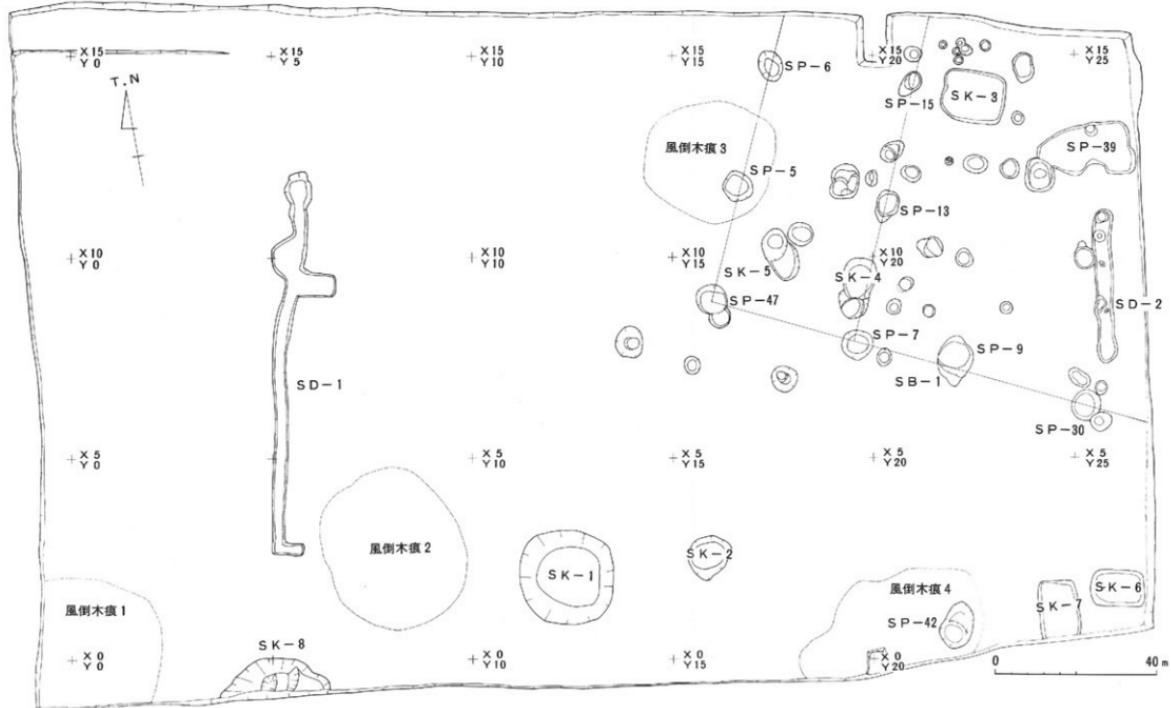
表上発掘後全景(東から)



発掘後全景(東から)

図版四

造構全体図



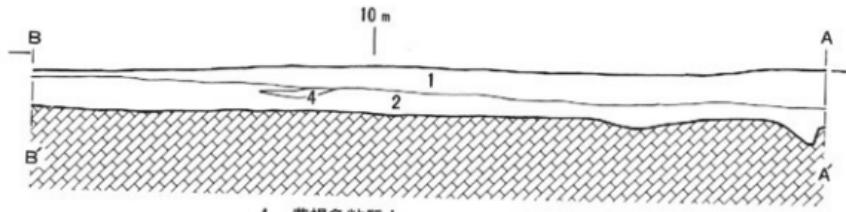
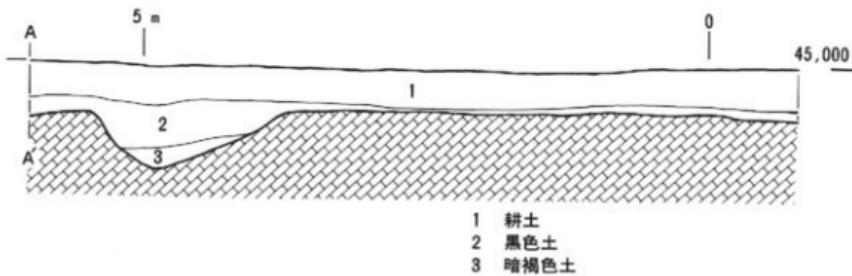


調査区南壁の層位 1 (北から)

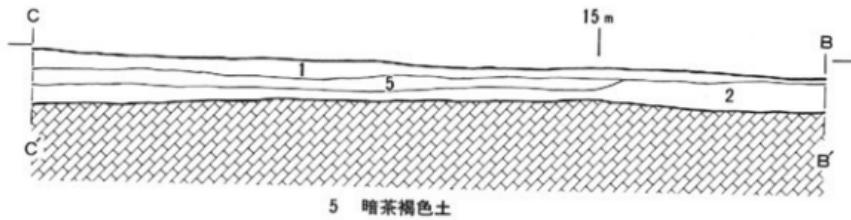


調査区南壁の層位 2 (北から)

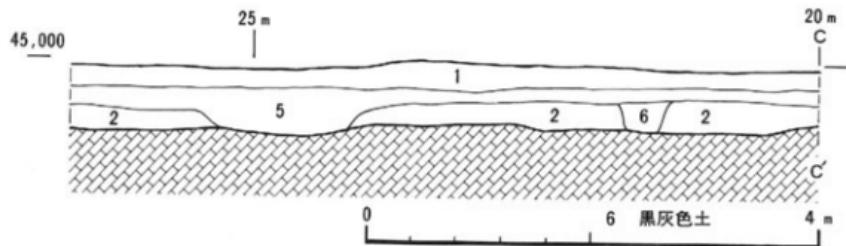
図版六 層位(2)南壁の層位図



4 黄褐色粘質土

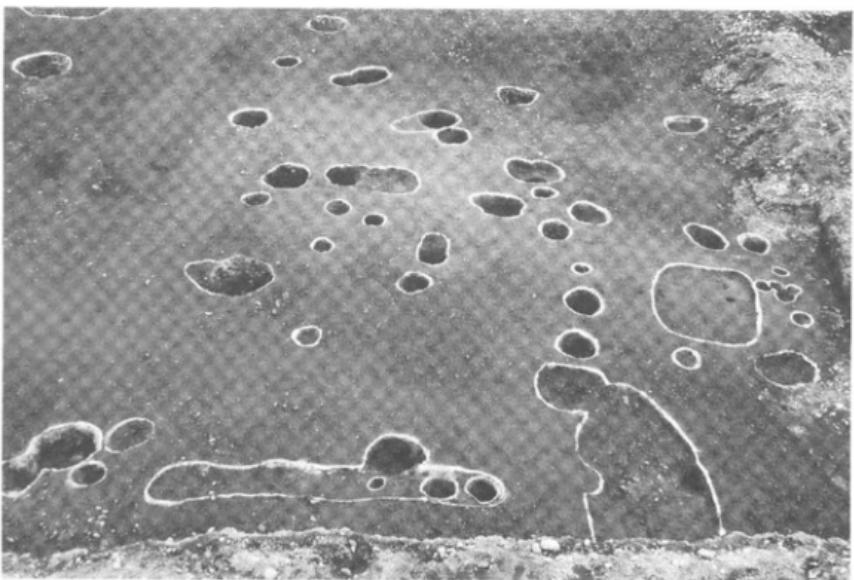


5 暗茶褐色土

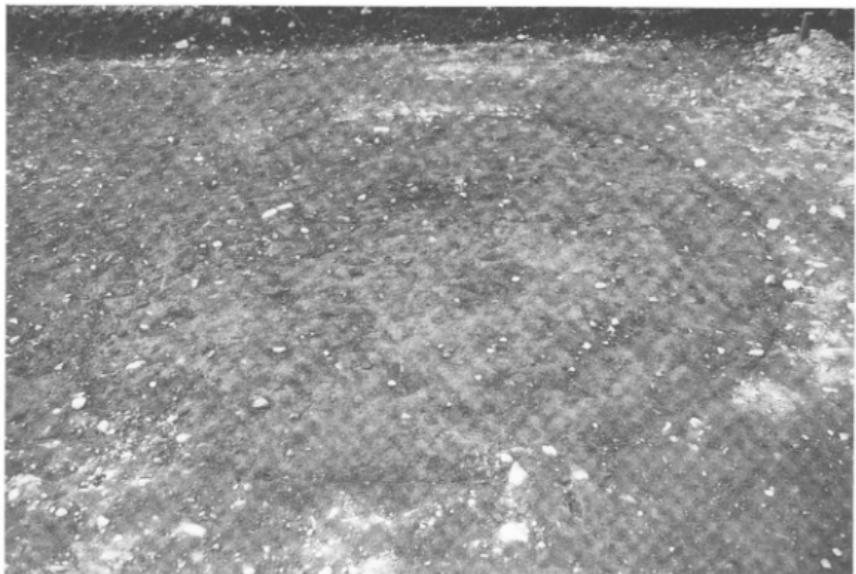




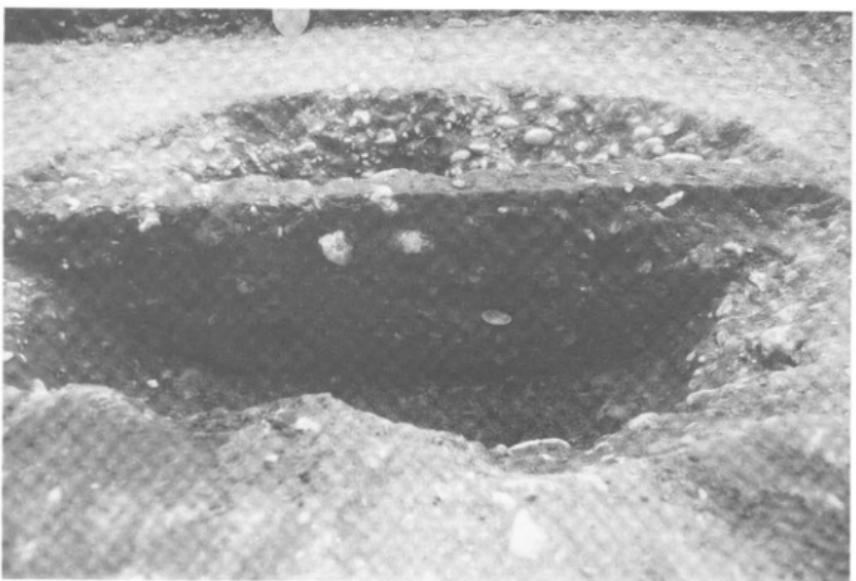
建物 S B - 1 検出 (東から)



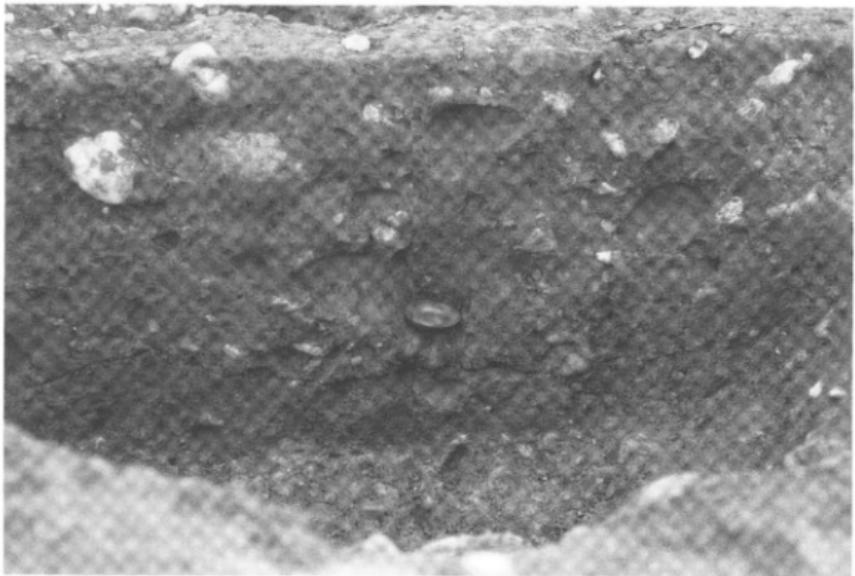
建物 S B - 1 発掘後 (東から)



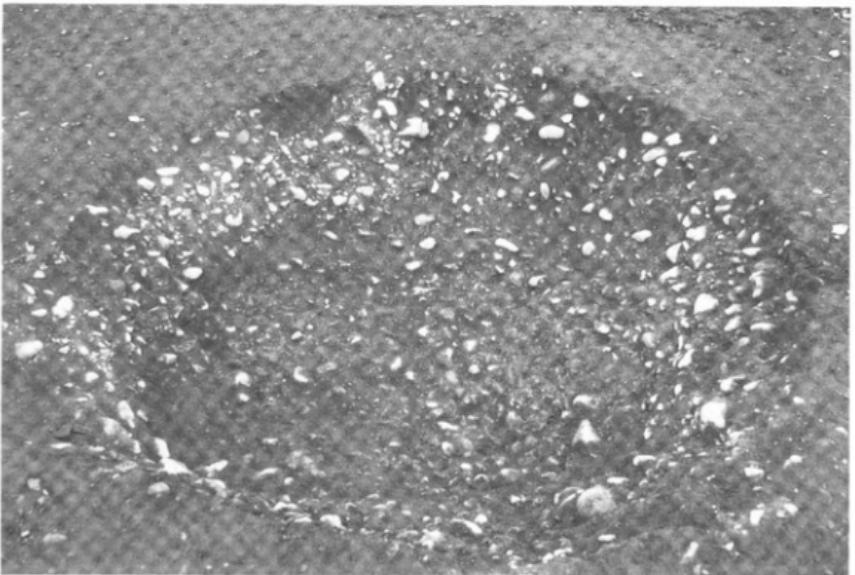
SK-1 検出 (北から)



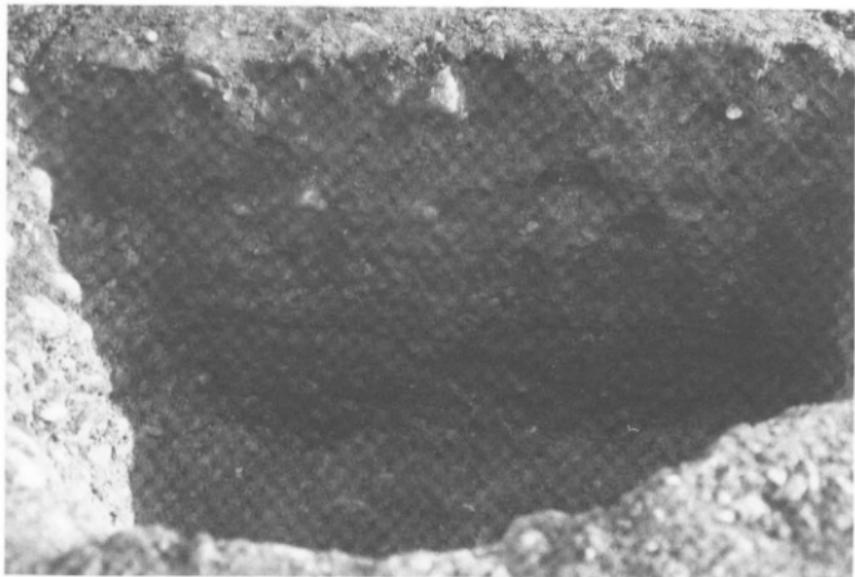
SK-1 層位 (北から)



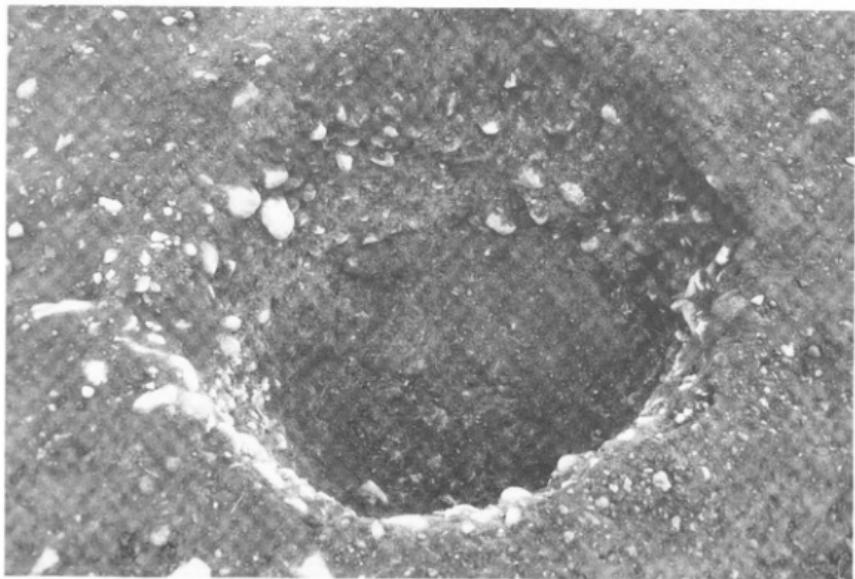
SK-1 土師器出土状態（北から）



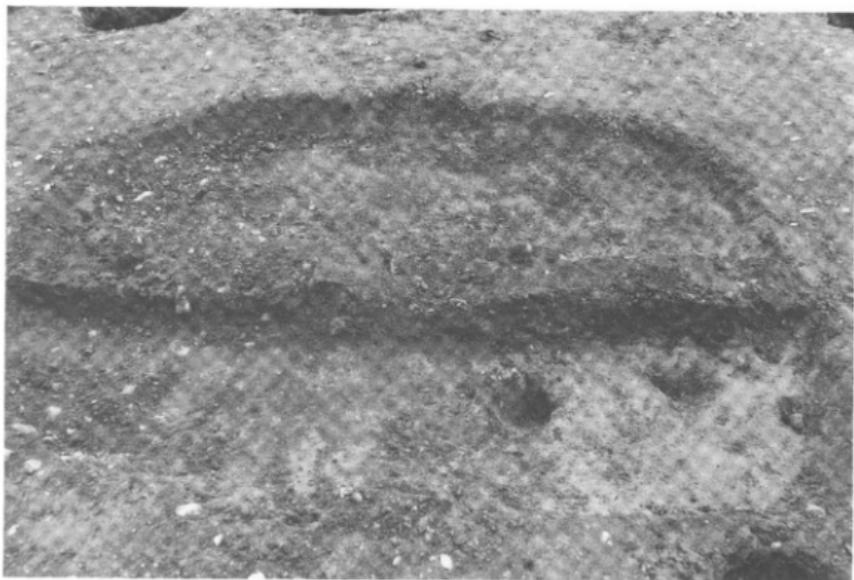
SK-1 発掘後（北から）



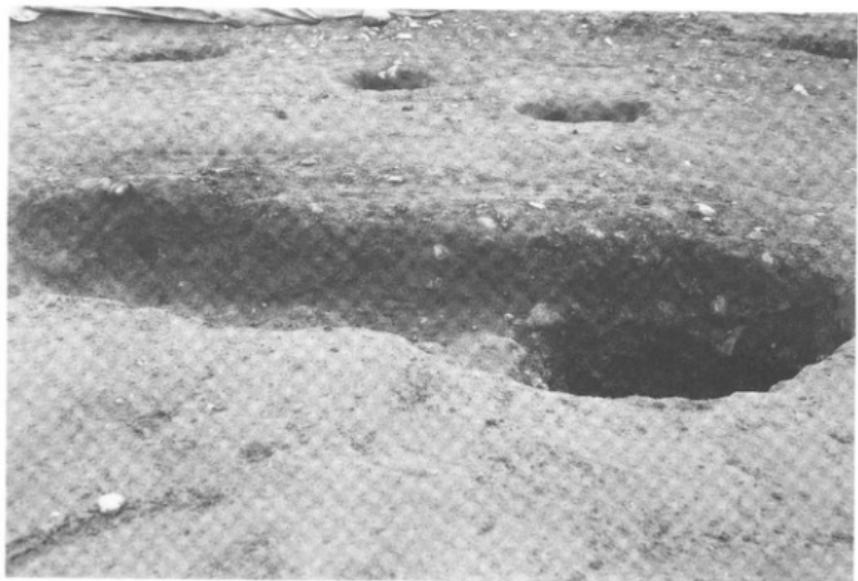
SK-2層位（北から）



SK-2発掘後（北から）



SK-3層位（南から）



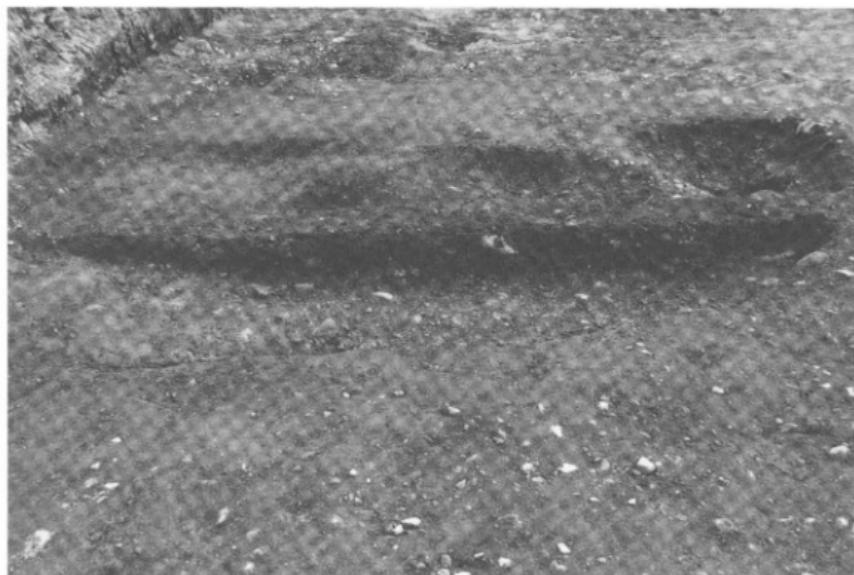
SK-4層位（西から）



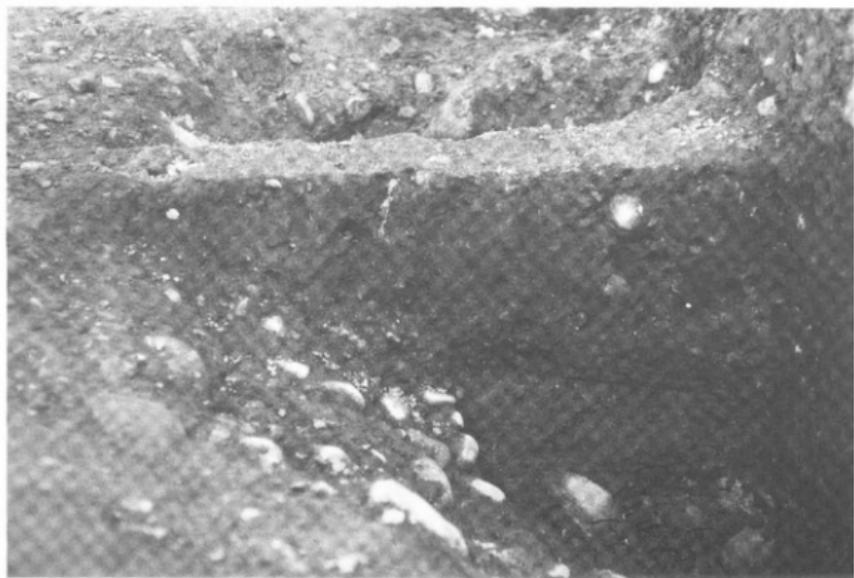
SK-5層位（東から）



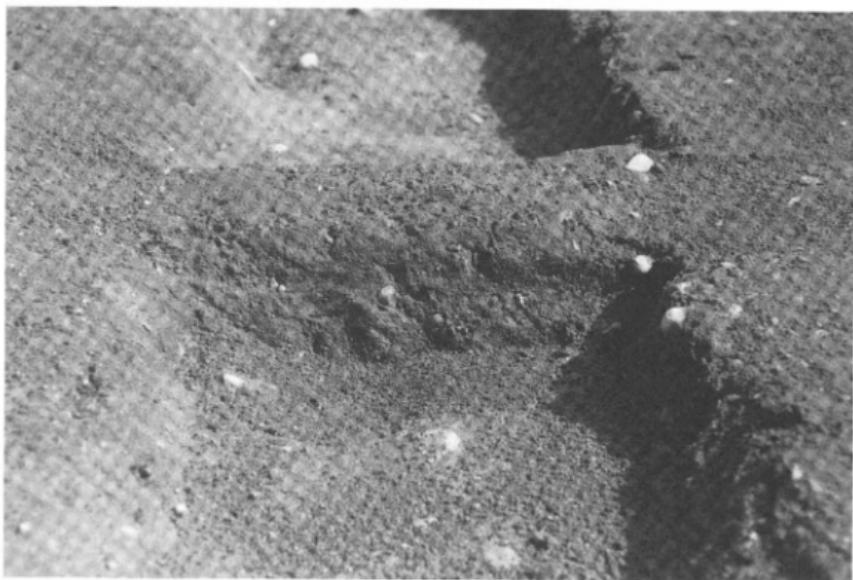
SK-6層位（北から）



SK-7 層位 (東から)



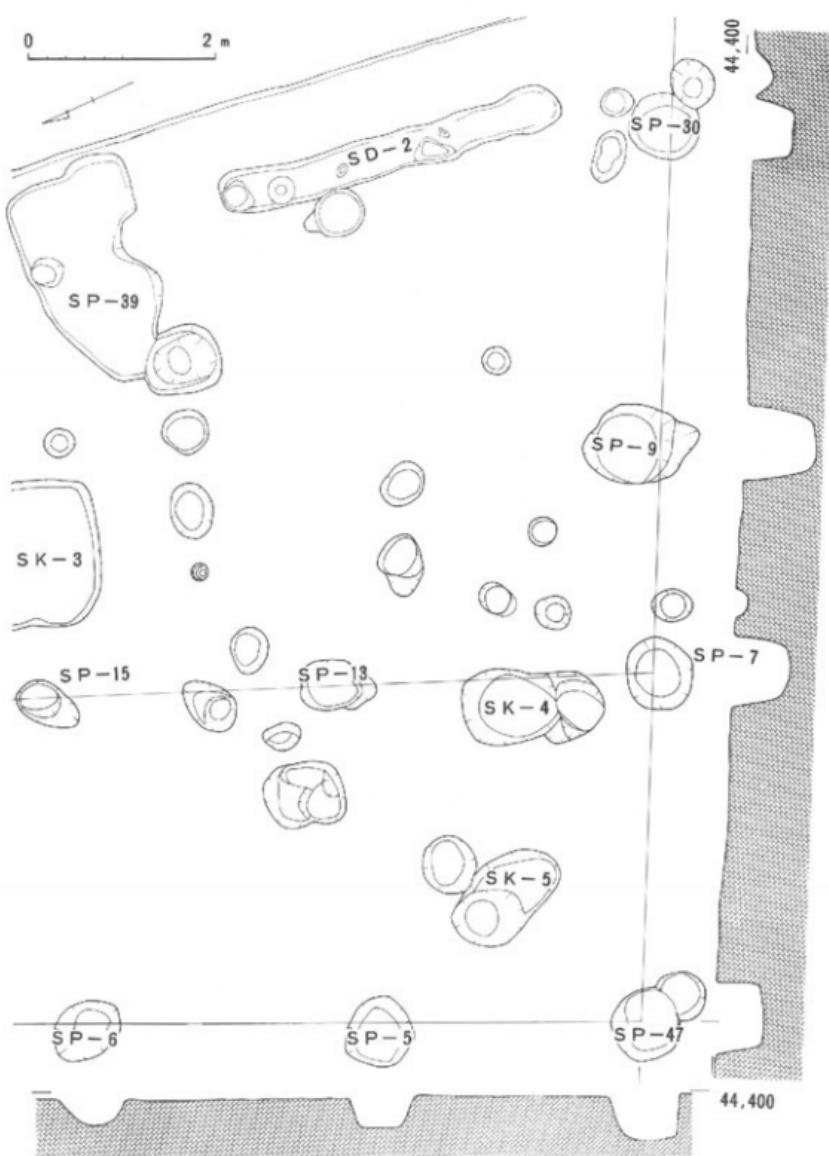
SK-8 層位 (西から)

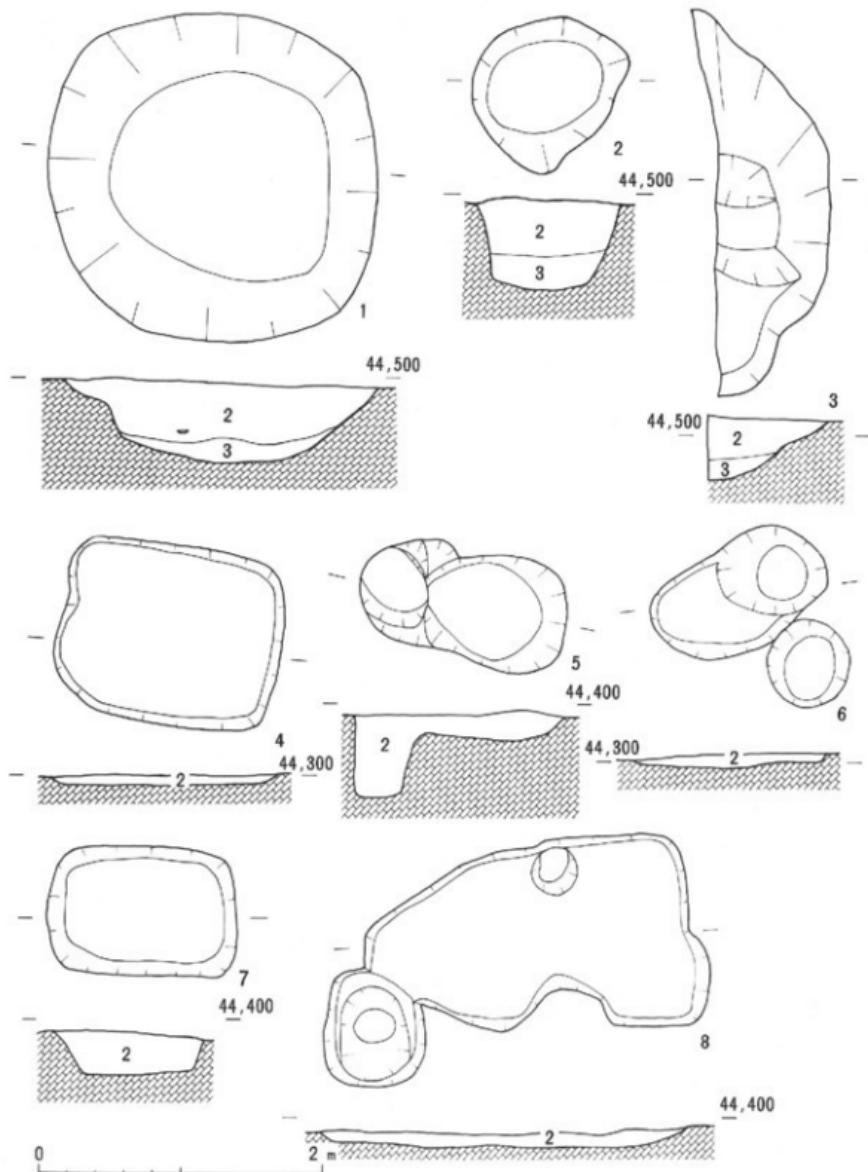


SD-1層位(1) (南から)



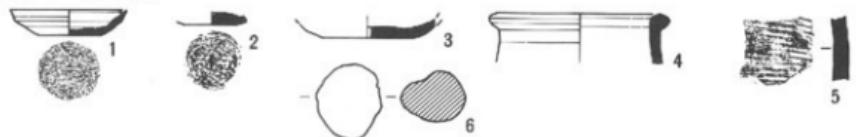
SD-1層位(2) (南から)



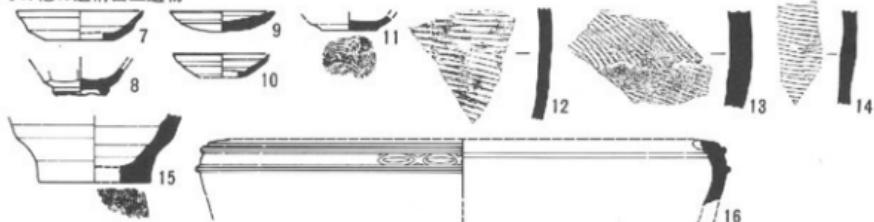


その他の遺構 (1. SK-1, 2. SK-2, 3. SK-8, 4. SK-3)
 (5. SK-4, 6. SK-5, 7. SK-6, 8. SK-8)

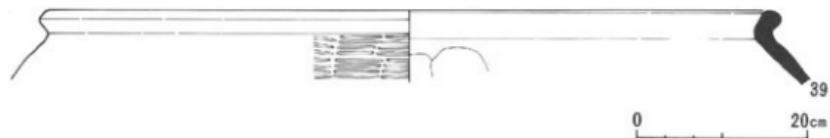
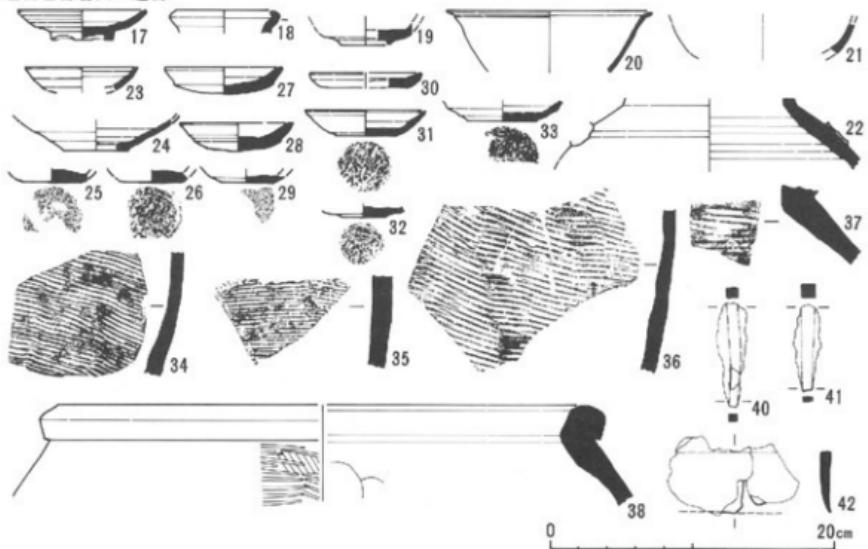
S K - 1 出土遺物



その他の遺構出土遺物

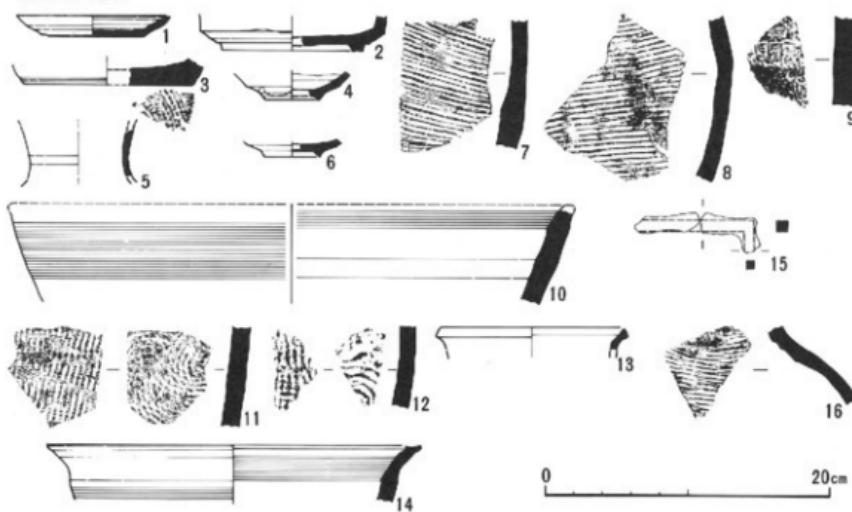


遺物包含層出土遺物



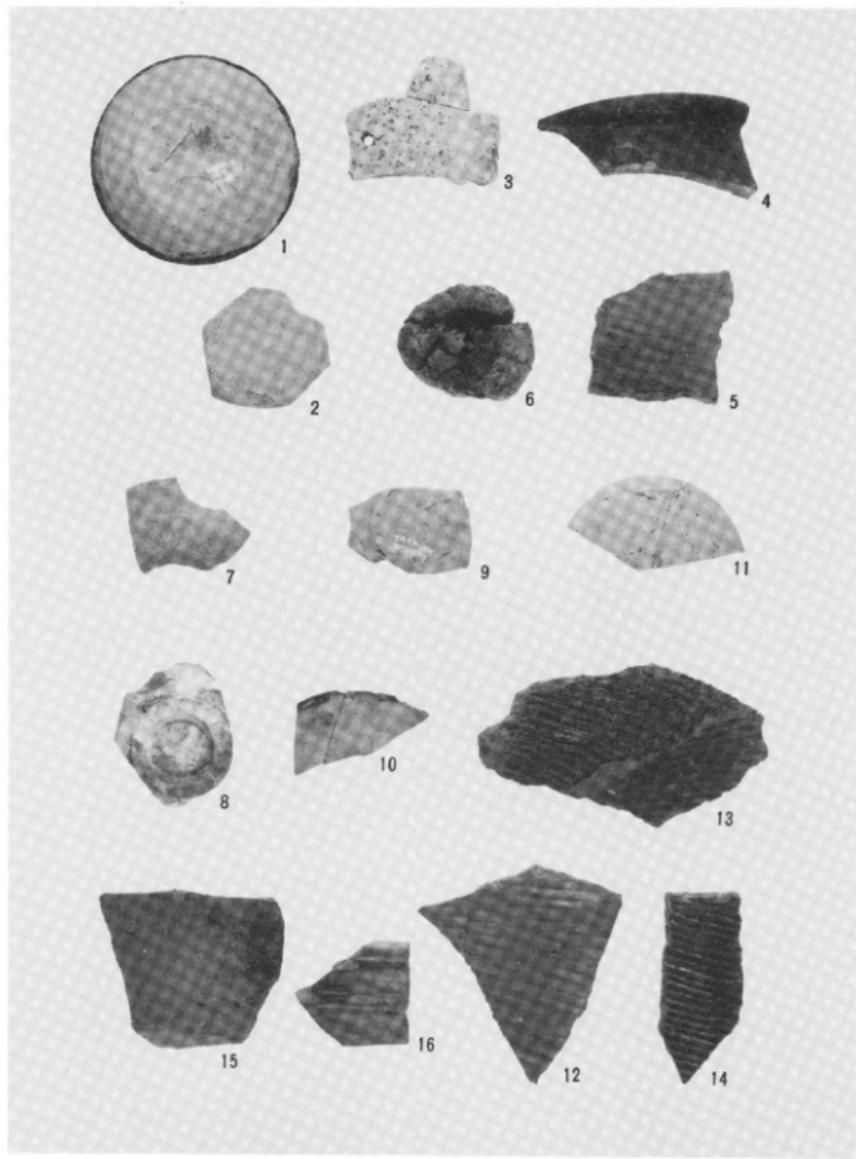
圖版十八 遺物実測図(2)

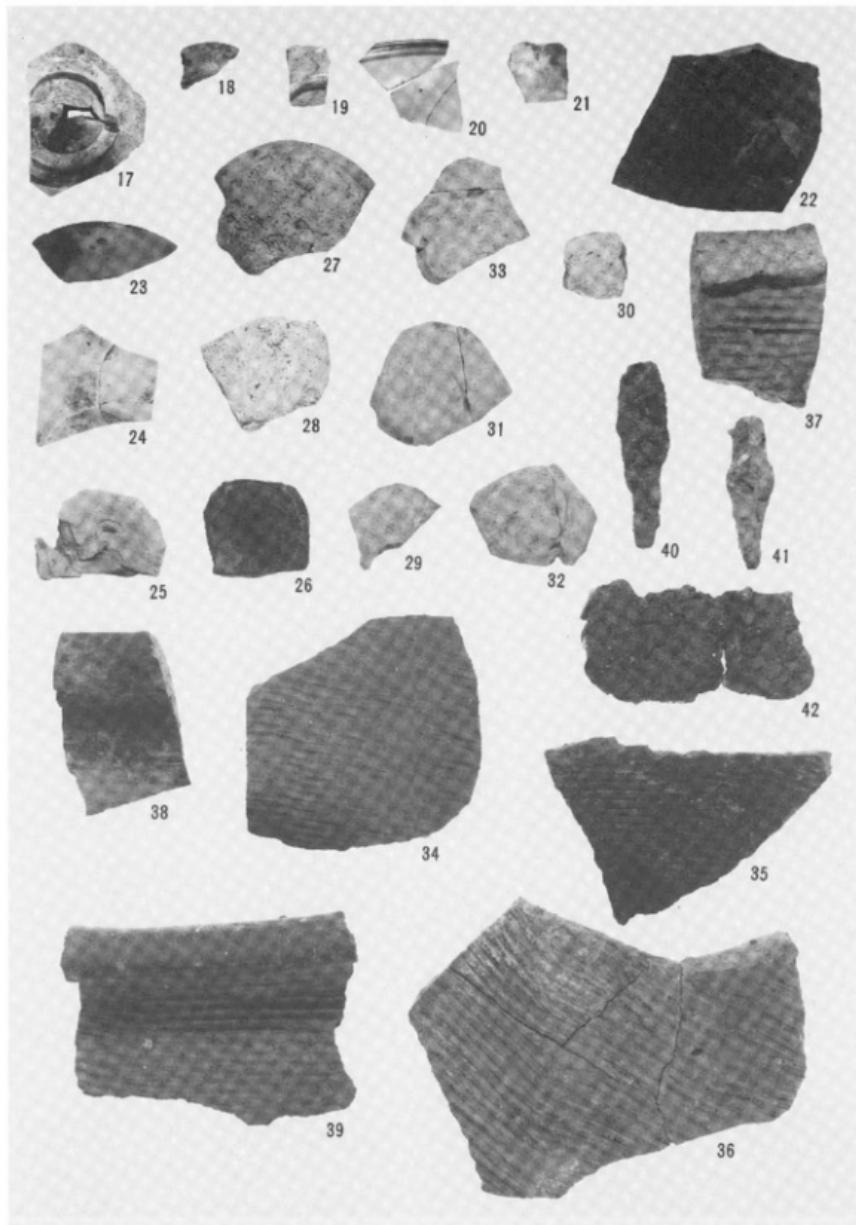
試掘出土遺物



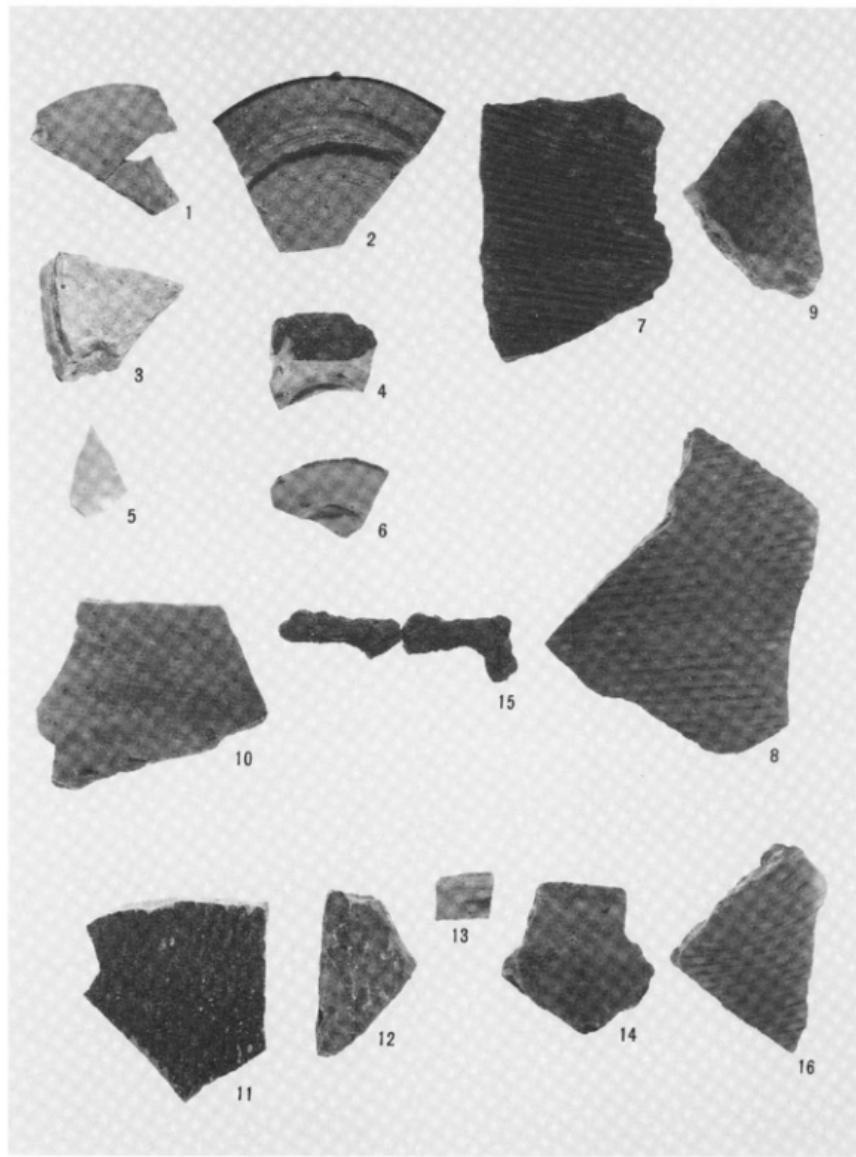
0

20cm





圖版二十一 試掘出土遺物寫真



秋元遺跡発掘調査報告書

発行日 1990年3月20日
発 行 研波市教育委員会
印 刷 アヤト印刷株式会社

